

発生が増えているイネばか苗病 ～発生予察データから見たその動向～

イネばか苗病の発生動向を直近5か年の発生予察データから検証した。発生株率は大きな変動がなかったが、2019年から発生地点率が高い傾向が見られ、広い地域で発生していることが確認された。この傾向は本病が多発していた1990年代初めと類似しており、今後、警戒と種子消毒の徹底等が必要である。

内 容

イネばか苗病は、開花期に感染した種^{もみ}が保菌して翌年の伝染源となることから、種子生産上最も重要な病害である。本病は1980年代末から90年代初め頃まで多発していたが、効果の高い種子消毒剤の使用で2010年代初め頃までほとんど発生が見られなくなっていた。しかし、近年、県内一部地域で、散発的であるが発生が認められてきており、かつてのような多発生^{けねん}が懸念されている。ここでは病虫害防除所の発生予察データからその発生動向を検証した。

検証には、2016年から2020年までの7月期におけるイネ病害の予察調査データを用いた。発生株率（以下「株率」）は16年、17年は0.1%未満、18年は発生が認められなかった。19年、20年も株率は0.15%未満と16、17年と同様であった（図1）。これに対して、発生地点率（以下「地点率」）は、16～18年は1%以下であったが、19年は3.4%と

発生地域の拡大が確認された。さらに、20年の地点率は6.3%に達した（図2）。この地点率を、多発していた90年代初め（データは1988年から1992年までの7月期）と比較すると同様の傾向が見られた（図2）。このことから、県全体の株率は高くないが、発生地域は広がってきており、今後は多発生とならないよう警戒する必要があると考えられる。なお、1992年には効果の高い種子消毒剤が使用されるようになっていて、これが地点率の減少に結びついたと考えられる。

今後の方針

本病を含む水稻の種子伝染性病害には種子消毒が最も有効である。種子消毒の徹底について、例年実施している講習会等で周知するとともに、留意点をまとめた防除情報^はを播種作業が始まる前に発表して注意喚起する。

松本 純一（病虫害部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2420）

